



異論 川端 富起子*宮城

里帰りの娘の肩のコチコチを揉みつつ話を聞いている夏
肩揉みて娘と繋がるひとときのこのやわらかさ麦茶の冷たさ
ビロードの翅を広げてリラククス 翅黒蜻蛉の夏を見ており
公園の真夏の朱をゆつたりと楽しむようなサルスベリの花
「降参しすぐ戦争を止めるべき」―われに異論の夫と諍う

樹の水 印出 美由紀 神奈川

ほがらかに老人ホームを訪ひたるを悔ゆくゆくゆく けふ釜熱す
蟬が来て網戸でジュツと鳴きました反対意見をメールした夜半
しんしんと樹を昇りゆく水ははじまりのみづ 蟬たちが吸ふ
ポリウムを落としバツハを聞いてゐるいつしやう懸命蟬が鳴くから
てのひらにつかむメロンはどつぶりと有漏路無漏路の水を宿せり

名残りの夏 前田 亜津子*神奈川

本堂に集う人等の間にも水柱花据えて盃蘭盆会かな
マトリョーシカ開けるみたいに次々と内から湧き出る憂鬱な気分
八月の沖永良部の浜に立つおみなおのこは神話のごとし
みんなみの島の香りも閉じこめて名残りの夏のマンガー届く
還暦を迎える秋へのアプローチ村上春樹を再読している

初めての花 荒川 ゆみ子 東京

北へ行く(やまびこ号)の窓に寄り螢のみさうな川を探せり
ジヨギングの速度で抜いて行くときにくしやりと髪に触れた、川風

原賀 櫻子選 「あすなる集」特選

夏の免疫 池松 卯月*北海道

そういえば去年の夏の今頃は名古屋の夏の免疫があった
頂いた台湾ラーメン満を持し食す名古屋の暑さを想い
食べてみて思う名古屋のあの味は暑さあつてのあの味なのだ
口々に暑い暑いと皆言えり札幌だつてまあまあ暑い
七月の末十四時の炎天下コンサドーレを厚別で観る

サロベツ原野 斎藤 嶺也 北海道

水無月尽菖蒲の花の咲き初むる明けの雨おとシロフォンのおと
雨つぶが交響曲を奏づるは築七十年のトタン屋根ゆゑ
見渡せば人なく家なく自動車なくサロベツ原野に選挙掲示板
サロベツの離農跡地にぼつねんと忘れものらしスチールサイロ
最北のオロロンラインに立ち並ぶ風車は受くるロシアの風を

夏来ればまたワンピース欲しくなる体は風を憶えてるから
問一が解けたみたいに朝顔の初めての花丸く開きぬ
丸の内線が地上を行くところ群衆のやうに紫陽花が佇つ
水上 芙季選

たとへないでね

前中 映 東京

戦車にもアクセルがあり踏みしめる兵士の若い脚があること
肩が消え胸が消えちさき暗闇に猫のお尻が消えてゆきたり
歯をみがきながらマウスを操ることがいつしか朝の日課となりぬ
重さうな胸を臂力に吊り上げて鴨が越えゆく雨後の葦群
風かをる朝の牧場の面積を東京ドームでたとへないでね

ぎしぎし

五十嵐 トシエ 新潟

始球式に斎藤佑樹は見事なる球を放りて観衆わかす
兵隊の叔父が帰りに呉れし菓子金平糖は思ひ出の中
草花に関心うすき我なれど羊蹄ゆきあしの名に惹かれ探せり
主義主張の無きタレントが出来るほど政治はあまく無いと思へり
暗闇に灯籠流しの朱の色が帯の如くに連なりてゆく

しばらく休む

高橋 梨穂子* 新潟

サンダルの形の日焼けに保冷ジェル当てる 夜明けを朝顔は待つ
ジャケツトは腕がされ畳まれまた人の形になるまでしばらく休む
カーテンを開けずに終えた一日は予報通りであつたなら雨
きみと会う約束をして飛べそうなところで選ぶフレアスカート
人間に近づくほどにロボットは疲れの感覚ばかり覚える

風はみづから

内藤 丈子 福井

ふうりんの音を鳴らしつつ夕暮れの風はみづから秋に近づく
秋霧は伊吹の山をかけおりて琵琶湖をわたる風に乗れたり
月のなき宵の伊吹の登山道ライトを消して姫ぼたる待つ
はつ秋の若狭の海風あびながらゆつくりと飲むレモンサイダー
甘海老の競り市のこゑ越前の空にひびけりけふは立秋

千屈菜の花

甘利 紀子 長野

初物と夫掘り来たる新ジャガで今日はカレーとサラダを作る
足腰の痛みに耐ふる日々なれど花の世話する時は忘るる
千屈菜の花の紫秋晴れの庭にひときは引き立ちて咲く
見上げては花火のごときを楽しみしアガパンサスの夏終りたり
背丈越ゆカサブランカの花盛り朝の庭に香り楽しむ

青柿の実

杉原 信子* 岐阜

猛暑日の続く夕餉の一品に焼茄子のうえ若荷をちらす
おばあちゃんお盆に行くねと電話あり花火買うねと女孫に返す
午後からはエアコンつけて籠る日々パッチワークの手作り楽し
気がつけば三センチ程に青柿の実が育ちたり秋はすぐそこ
早朝の涼しきうちに茄子を取る茄子紫がぴかぴか光る

鈴木 竹志選

夏の星空

井上 啓子 愛知

夫の作る唐黍甘く茹であがり幼子ふたりひたすらに食ふ

「カラスらがまたわやをした」と嘆く夫畑に地豆の黄の花咲けば
子とともに夏の星空眺めし夜さそり座射手座くつきり見えき
亡き姉の本の好みを受け継ぎて竹西寛子の「管弦祭」読む
世界史の恩師は語りきヒロシマの駅に降り立ち被爆せしこと

生かされて 梅本麻子 三重

喘息の吸入薬の副作用はたまた齢か歌へぬ声帯

暑しと袖なし着るにその腕骨皮筋かひなの老醜露出

目葉が目から鼻へとぬけました少しは賢くなれるでせうか

空襲に夜毎眠れぬかの夏より七十七年生かされて九十三

テレビドラマ戦中のさま映るとき違ふ違ふと見る気の失せぬ

青 大 将 高瀬和子 兵庫

「わたしにはこどもが三人あるみたい」小五がなげく父、母、兄を
小川には終日子らがやつて来て泣いたりわろたりにぎやかだつた
二年余の寿命しかなきハムスター買はれて来たり孫らのもとに
去年会ひし青大將が出て来ないほつとするけどちよつと気になる
「兵役は僕らの義務」と言ひ切りし十五の少年真顔くづさず

退 院 高瀬 満由美* 兵庫

病院の工夫はわかるが骨なしの魚はちよつと物足りないよ
十余年もほつておくから筋肉がつかないのよと蟬に叱られる
屈めない術後の我に青年がニコニコ顔で取ってくれた蓋
饅頭が綿菓子に変わる白雲を窓から眺める手術三日目
一つつつ呪縛が解けていくようなりハビリ効果 明日が退院

リハビリ体操 沢田弘子 奈良

家族らと別れて暮らせし一年余学童疎開を思ふ八月
お盆には帰ってくる夫驚かむ庭の雑草のびのび育つ

手の怪我もやうやく癒えて少しづつ草を刈りゆく涼しき朝に
週一のリハビリ体操楽しきは休憩時間のおしやべりタイム
竹の棒に松脂つけてとんぼつり兄と遊びし原つば恋し

夏バテ解消 児玉幸子* 島根

産直に長い苳豆さやびの丸められリースのごとありごま和えにせむ
前の家のお花畑を日々ながむ「拝観料」を払えと夫は

夏バテを解消しくるモロヘイヤ・オクラのネバネバ夫は昔手とす
たまりたる空ビンに思うこの猛暑支えてくれしドリンク剤よ
五十余年共に暮らせば知りつくし夏はアイスで機嫌をとれり

松尾 祥子選

四十度の夏 江崎玲子* 福岡

三十度室内温度を涼しいと感じてしまふ四十度の夏
親鴨に子鴨が添うてゆくような自転車の群れ夏祭りの朝
ビードロの酒杯の足の欠けたるを直せば昔の色よみがえる

分身の術のごとくに切り替えるソーシャルメディアは多彩人格
夏風邪も胃腸炎をも巻き込みて対コロナ戦七回表に

ツクツクハゲメ 小松省己 佐賀

アキアカネ朝日子に羽輝かせ群れ飛ぶ中にジヨギングをする

お盆会に訪ねる人もあらなくに畑たがやし種を蒔くなり
光太郎の(手)に魅せられて四十に彫刻始め今日もつづける
推敲する書斎の窓ゆ法師蟬ツクツクハゲメとくり返し啼く
セピア色の軍服姿の青年はフィリピン出征のわが父なりき

朝の日課

鶴田竹一 長崎

旗・帽子：民生委員のベスト持ち飛び乗るバイク朝の日課に
小学校の庭にヒマワリ空見上げわいわいがやと登校日待つ
兩上がり草抜き出せばはまり込み二時間遅れの昼飯となる
あつちには行くなと孫の手を握り数値見つめた救急車の中
五十年社の歯車で勤め上げ里の茅野と格闘の夏

引退名馬

新屋希子 熊本

夏草の深く茂れる馬場駆けし馬のひばらは朝露に濡る
名を呼べど観光客には振り向かず栗毛の光る引退名馬
シニヨンのサテンのリボンをなびかせて馬に乗りけり学生のころ



大松 達知選

「その二集」特選

ストッパー

成田裕子*青森

夏の路にオレンジ色を落としつつノウゼンカズラ静かに終わる
帰省してまた戻りゆく君といたただの日常ただ君といた

脛に触れ馬蹄の泥を洗へるは細さかひなの厩舎の娘
「私には最初の馬」と馬主言ひ安楽死から逃れし老馬

鉛筆

川越 三紀子*宮崎

暗闇にぎゅっと押されて子ヤモリはガラスの窓に張り付いている
人声も辺りの音もかき消して命しぼること蟬は鳴きいる
好きになった、惹かれる言葉、作歌メモ、心の襲を記す鉛筆
処置室のピアノの曲がYellowだど気がつくまでに緊張とける
亡き母の味懐かしきさんびらのぶつぶつぶと醬油はじける

をさなのゴール

田中司郎 鹿児島

真夏日に万歩を目指す宵のうち心地よき身に深緑の風
わが手からいつしか抜けて飛び立ちしを思ふに風船のごとし
帰り来る車音聞き分くる飼ひ犬の声の出し方に誰彼と知る
野の原に針刺すごとく降る雨は次第にけぶりわが身に迫る
公園の噴水浴びつつ走り回るをさなのゴールは母の両腕



帰省した君とメロンを切り分けてフォークでつつくだけの幸せ
目眩というストッパーありこの夏を静かに過ごせとわたしに告げる
沿道に落ちた花殻この夏を終えたノウゼンカズラか私

さみしくない

工藤玲音*岩手

雨水を車にべしゃと掛けられてうまれてはじめてだからうれしい

横たわる「腹」という字に「はらたてぬ」とルビの振られて酒は二杯目「傘立てのほとんどの傘もうだれのものかわからんからみんなのだ」モヒートのハーブ合法ですよねと問えばしーつと笑うマスター大人になり夏の終わりがさみしくないタクシーの窓開けて星見る

食 　　む 　　業 　　　　　　福 　　島 　　健太郎 　　神奈川

納得のできる答にいたらねば八月の雨街を濡らせり
老いてより小雨降る日もかたくなに散歩をやめず何をか証さむ
死ぬことは契約書にも記載ありほかは示談に処すと、余白に
ぬばたまの夜を旅せるものづかれ夢の河原に斃れしは我
朝食に苦手なブロッコリーだされをり口に運びて食む業をせむ

な 　　つ 　　お 　　と 　　　　　　岩 　　館 　　澄 　　江*東京

ここだつて決めたところで羽化をした蟬に迷いはあっただろうか
なつおとを支配している蟬たちの声はただただ雌に向かつて
ロングウェイ 　くたびれてると果てしなくのびる駅徒歩十分の道
気晴らしができないために永遠に眠りつづける私の場合
いっただけ骨格のないクッションが大好きだった最初の記憶

朝乃山さん 　　　　　　奥 　　　　浩 　　昭 　　東京

ゆはへられ支へられつつ川べりの歩道に揺れるやぐるまの青
田に隣る木道ゆけばふうわりとハグロトンボがわが前をゆく
蟬の声やはらぐときをウグイスの澄めるこゑあり天文台に
三段目優勝したる朝乃山(朝乃山さん)と呼ばれてゐたり
(パオーン)や(ベエベエ)のオノマトペよし池田香代子『動物会議』

大野 英子選

乱 　　　　　　蟬 　　　　　　佐 　　藤 　　多佳子 　　新 　　潟

乱蟬に膨らむやうな朝風が山から吹いて野積^{のづみ}へ抜ける
照りつける太陽光を反射して灼熱の砂海までつづく
二十年ぶりの海だよひたひたと足に吸はせる海の塩分
ぶかぶかり波にゆられて漂ひぬ寒暖の差に潮目を感じ
太陽光を体にどんどんチャージして骨も強固になつてゆく夏

大きな木舟 　　　　　　小 　　森 　　鈴 　　子 　　岐 　　阜

朝空に大きな鱈が泳ぎをり銀のうろこを光らせながら
肉ジャガにせむとクルクル皮を剥く人にわたせぬ小さき馬鈴薯
洪水への備へここにも軒下に大きな木舟がつるされてをり
広島の方にむかひて折らむと夫とならびて畑に立てり
モロヘイヤ好きと言ひたる下の子に採りたて三袋持たせてやりぬ

私 の 書 齋 　　　　　　梅 　　沢 　　佳 　　子*静岡

百均で買った手頃な黒い籠何でも入る私の書齋
戻り梅雨長く続けば梅達は干す日待ちて赤く染まりぬ
しまい湯に身体伸ばせば向かい家の風鈴チリチリ激しき音たつ
十キロの梅炎天にさらされて部屋の中まで香りが届く
干し上る梅干しぶくぶく嬰兒の肌思わせる手のひらの上

裏切りはいつも 　　　　　　池 　　田 　　あつ子 　　愛 　　知

半日で洗濯物はからからと乾きてをりぬ 　　夏いさぎよし

夏の陽にはじめて赤き鹿の子百合庭につきつき反りかへり咲く
亡き友がほはりと頭ちぬ貴女から一鉢の百合を貰ひしあの日の
この夏もひまりは陽に向きて咲く裏切りはいつも人間の方
道の辺に揺るる茅花のやさしさは風のやさしさけふの風待つ

本 音 大 池 アザミ*兵庫

「もう着ない」娘、息子のお下がりで気がねしないで日常過ごす
勢いで書いたメールのてにをはに本音がもれていたかもしれない
負けたのだ何にだろうかエアコンのスイッチ入れる刹那に思う
飲み干したビールの缶がテーブルで起立している証人のこと
わたしつてこういいうしゃべり方だった 帰省するたび早口になる

津金 規雄選

知 覧 ・ 鹿 屋 戸 田 セツコ*広島

季すぎて萎れし合歡の花ほそく絹糸のごときが葉にまつわれり
卒寿なる今も「ヒロシマ八・六」献納の鶴折る参拝できねど
終戦忌にたむ折り鶴零戦の知覧・鹿屋の空を偲びぬ

どしや降りも大地をうるおす恵みなら濡れてもみんか草木のように
ペランダを吹く風すこし涼しくて雲しろき空もう秋めきぬ

何 も 専 務 石 本 洋 子 佐 賀

色褪する父の遺影が気になれど弟嫁に言ふことはせず
ばさばさの髪は脳の疲れかと頭揉み揉み考へてゐる

籠りゐるのみの夫にけふは言ふ「何も専務は困りますよ」と
大好きな八千草薫の話し方学ばむとしてビデオを掛ける
蒸し風呂の熱さに耐へて十五分いち早くわれ砂を跳ね上ぐ

人 生 百 歳 牧 野 雅 子*佐賀

旧友との電話たちまち盛り上がる幼き頃の話をすれば

うさぎ跳び今も易しと友の声受話器の向こうで始めそうなり
親友に「人生百歳目指そう」と元気を貰う超長電話

加速する老いに抗い運動ジムへされどインストラクターに恋
ジムへ通う効果なりしか階段をトントントンと上るも軽やか

強 面 西 山 伊智子 鹿見鳥

庭先のビニールプールで泳げたと足ばたつかせ喜ぶをさな

整形医のいつもと違ふ強面 閉院前でお疲れですか

風蘭の香り広がるウッドデッキ白き小花に故郷浮かぶ

老犬はか細き声を最期として冷たくなりぬ七月二十五日

食事みなおいしいと言ふ一歳半腰痛わずれ厨に立つ吾

かりゆしウエア 牧 島 幸 造 鹿見鳥

「渡し賃なくば泳いで渡るさ」と爺は語れり三途の川を

初掘りの落花生へと語りかく「四カ月待った甲斐があった」と

日盛りに木陰で一息入れをればトンボ群れ来る立秋の前

カラフルな（かりゆしウエア）身に着けて沖繩気分で暑さ楽しむ
なつかしきスイカの種の飛ばし合ひ一人ですれば少し寂しき